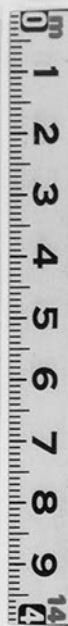


呈
麥 聖

第 四 輯



平 塚 柴 田 書 店



野 麥

第四輯



野 麥 第四輯 執筆 者

小山田	滋	美崎一郎	半谷絹村	白鷺あきら
松村	清	五十嵐雄之	大和田水明	小野一路
佐々木	顯	小濱牧泉	武石錦楓	野原百合雄
佐久間安生	赤井嶽男	今野梅檀子	佐藤正顯	
島田忠夫	吉田甫	渡邊武門	釋獨步	
城芝	鳴瀧	三地子	下山田涓至	高木愛二
池雅實	耳舜	一田口對星	高 endpoint	巍
田中賢介	野本大藏	箱崎半吾	石橋柴子	
佐藤清長	渡邊何鳴	草野葉子	野本多霞夫	

梅もどき

小山田滋

何事もなきかの如く梅もどき日に日に紅し晴るる日づく
獻納の乾草刈ると一部落朝露ふみて押し出してゆく
應召者の留守の稲田も刈られしと嬉しき話聴かされにけり
手を振りて軍馬のなかにひとりゐし友の軍装たしかに認めぬ
葉にすが一つの虫に此のころのころは脆し觸れしめらるる

九月以後

松村清

書きあげてひそかにふれし寂しさのつくづくとかろき心眺にけり(勤め辭んとして)
勤務辭めむ思ひに安くありたれど年ふりなれて今朝もめざめつ
朝廷に青さ目につく葉ぼたんの行々しかもただ葉となりて
南天を賣る老翁のひげ白しバストラックをさけつひさしき
鋭き聲すればたちまち銃ふるる音牙えきこゆ思ひ緊り來(軍教)
緊迫のこの教練を音にききたまゆらは立ちわれりたりけり
新參の坑夫なるらし炭塵にまみれしままに出坑來にけり
稼働高にはばかりもなく口喧嘩すくつたくもなき電車の中は
ゴム靴の素足にきしむ音さむし出坑坑夫らつらなりゆける
酔えくれば念佛申す人の癖面白きことにききゐたりけり
人のくせききゐつふつとおのが癖に觸れつると思ふ寂しさわけり

山頂に據りて三日は生かんぶらに鹽ぬりはみしとたより來にけり

動員令

佐々木顯

動員の夜半に來れりその家族みな目ざめては準備にせわし
さ夜ふけて動員來れり翌日早や出發準備にいそがしき家
うろこ雲にあかねさすに見るやたちまちに朝日出でたり靜かなる海
落葉して枝まばらなる並木道自動車ひたに走りい行くよ
初霜の頬赤々と學びやに急ぎ行くなり小學生徒(早起デー)

出征兵士を送る

佐久間安生

ひとごととに戦争に召され征途につくものふを送るたかぶりが見ゆ
驛頭の應召兵士にはなむけの言おくる村長の面きわみぬし
いくさに征くもののふのきほひ歡送に幾重すかれつつ覺悟を云ひぬ
心きめて征くもののふが歡送に別る言もきわみいさぎよし
雨ながら歡送のうづおしわけて出征兵士にたたく逢ひたり
ホームに起りし歡送のうづをかひくぐり兵士の手頸にぎりしめたり
歡送にきほひ握ぎられし兵士の手あかあかと血のまはりよくあり
前の人も人蔭のひとそれぞれのかぶりし聲を兵士にかけぬ
窓よりぞ打ち振る國旗なびきつ兵のせし列車ホームに着きぬ
兵のせて列車つくや否や歡送の地もさくる如き萬歳の爆發

庭上秋色

島田忠夫

秋さむき二日の雨に蔓珠沙華くれなゐ綻せてかたむきにつゝ
伸び立ちし胡桃苗木の葉はひろし濡れいろさむく滴りてをり
苔の上に今年植ゑける石楠の花芽にかあらむ堅きふくらみ
姫紫苑あめにみだるる一むらにやや枯れいろの羊齒伏し入れり
花もてるぬすびと萩に絡みつ咲く朝顔の早や小ささよ
ふとぶとと花莖立てる石路や秋さめに濡れて光るともしさ

五 浦

城芝鳴

十月十七日五浦に遊ぶ。五浦館にて George D. Aked と言ふ英人畫家に會へり。

築岸をとゞろきて越す白き浪尾根の小徑に嚴しと見る

磯山にこもらふ畫の潮騒は湯室の方ゆ響き來るらし

二十日前上海を發ちしと言ふ君はフレンチビールの甘さを讃へり

コムミニズムもファツシズムも惡むと言ふ雨を聞きつゝ對ひ居りけり

語呂多く忘れ果てつも解らぬは解らぬまゝにうなづきて聞く

言解かぬ外つ國に來て秋雨の細々と傳ふ寛見てをり

樋口に動かぬ緋鯉珍しみ君は黙して立ちて見にけり

雜 詠

この朝け母の聲なき厨べに蛇焼きにけり冷え覺えつゝ
うつそみの吾がいたつきはくひつゝも心素直に經りし二年
血を喀ける夢に目さめて侘しかりきぞは健に働きしものを
應召の君を送ると驛に來て月並な言葉並べてすべなし
萩の花に露置く澤の夕霧に身は濡れにつゝ瀧を上れり(上遠野村瀧)
なみよらふ山の峽より霧湧きて佛具のわたり雨到るらし
鐵塔の聳ゆる黄田にあきつ飛ぶ村道に高壓線のたるみ深しも

時 局 と 妻

池 雅 實

千人針われに知らさず作りし妻妻もひそかに覺悟せるらし
壯烈なニユース映畫の場面にて思わす妻は拍手しにけり
感激に思わす拍手したる妻心ひそかにつつしめるらし
夕まけて千人針縫ふひと群の一針づつを妻は縫ひ來る
千人針の一つ一つを縫ひつ來る眞面目な妻をたぐみ待ちぬ
名ばかりの床の間なれど花活けるやさしき妻の心づかひわも
この掛軸はかけつばなしの軸ながら妻の生花によく似合たり
妻病みてはなればなれに住むゆゑに虫のあはれを想ひあるなり
去年の秋妻と聴きたる虫の聲かくまで淋しと思はざりけり
向ふむきだまつて遊んでゐた子達やほら二人は争ひ初めたり
子供乍ら眞けんに争ふ二人なりどうしたと訊けば唯泣きぢやくる
おとなしく人のいさめを聴き入るる子供のすなほさわれもたぬかも

秋

風

その他

田中賢介

午前四時響きを太くサイレンは炭礦街の朝をゆさぶる
首玉をかすめてすぐる野分なり薄仕事着に冷えを感じる
深呼吸朝の空氣に吐く息は黄色き蒼き歎息に似る
この朝夕わが入坑をおくり込む黒きロープは命の綱なり
味氣なき生活なりしよあんと流るるものを胸に持ち居り
坑夫一人宿命づくに生くるとき飢えよりくらき世を思ひ居り
時によりてけもの如く喧嘩するこのけつだんを吾れとうべなふ（喧嘩五首）
わが不幸ついに微塵に爆發する朝の刺戟よ喧嘩といふもの
うつぶんのやりどころなきこの朝野菊の花はしなびてをれり
一物も二ぶつも胸に秘めてゐてついに不平となるをおそるる
トロツコは遮二無二軌道を走りゆく瞬間胸に消ゆるわだかまり
欠伸する子の寝ね顔に秋の夜のともし灯つけて夫婦ねむらず（子二首）
親馬鹿といふはかにかくめでたけれ子の嘘にも心おきつつ
たたかひに己れ疲れて蟬鳴も鈴をおさめて秋ぞ深まる
よむ歌よ吾れに生活のけじめとも思はれるなり野は秋の風
歌いですさぶ心をほつたりと晝の野分に吹きさらしつと
火にくべて蜜柑の皮の香にたてば想ひは遠し紀伊のふるさと
幾山河越えてはるかにふるさとに父のみ骨を埋むるは何日
かくてわが移る若さか炭礦にきのふもけふも佗びくらしつつ

秋

の私

佐藤清長

何も彼も我れから離れ行く如く秋十月はさみしかりけり
行きかへり三十年をあくと過ごし來たるも不思議なりけり
泣きたさの心いたはるものなきかあれやこれやと想へ出せど
かゝる日に人あり我れをあやしなば心甘へて惚れもせむもの
現つには會はれまじきに空しくも人の誓ひを抱き來たれり
雷同と人のそしりも甘んじて享けて見むかな何か事あれ
すき荒き枝を洩れ來て一天の月の光りも寂しかりけり
雨止まず霽れよと思ふ氣がかりの何かけはしきものとなり居る

地

圖

美崎一郎

支那の地圖我も買ひ來ぬ開きてはわが空爆の都市をまさぐる
我が従弟のたよりを書きし姚馬渡はこゝかと思れば親しさのわく
ソヴィエートの山川に眼をさらす時滿洲國の何ぞたのもし
トーチカの散在すといふソヴィエト國境地帯はこゝのわたりか
國境に築くいく重のトーチカは何の故ぞも討たざるべからず
ソ聯國境に眼は向きゐつゝいつしに空爆の様思ひ居にけり
小さけれど世に君臨の姿なり赤く染まりて火のもゆる國
英佛露よしやこぞりて來るとも皇軍の力われ疑はず

秋 雜 詠

野 本 多 霞 夫

あきらめてものを思はぬ秋風の窓に明るき花賣りの聲
しらじらと夜明けの闇に木犀の花はさながら珠のごとく見ゆ
一もとのコスモス風に亂れゐてはづかに情のうごく庭なる
コスモスの花に細葉にふりそそぐ雨足しろし朝の身の冷え
石工たち静かに石を刻みゐて夕陽の色に冷ゆる鶏頭
朝晴れの秋の冷風に澄み入りて湯わくしらせの拍子木の音(山の湯)
大掃除ともかくをへて秋風の障子に今朝の落つきを知る
甘露煮の蝗の味を噛みしめて落つきおぼゆるさとの家
貯水池の水ゆたかなり夕風きて野菊の花の影まとなりぬ
花八つ手煉瓦の塀にのぞきより晝ひつそりと音もなき家
柿の實のたわわに熟れて吾が庭の陽の明るさに目白きて居り
腰低き動作を吾れと見つけたるショウウインドウの冷たき逆光
櫻炭ふいとほけておのづから部屋(きむろ)の空氣のゆるみゆく夜
こほろぎは一夜啼きたり煩惱の捕虜となりし不覺を思ふ
張り替へて障子静かなりこの朝の秋のけはひをたのしみてゐる

千 社 札

武運長久祈願太鼓の音はれて秋はさやけし八幡社の杜
穂すすきの揺れ波寒き小砂利道千社詣のつらなりてゆく
横顔を秋のうす陽にてらされてしづかに人等千社札を貼りをり(境内)



ひなげし

五十嵐雄之

あやまちでひとと生れぬはしきよし
身はくれなゐのひなげしの花
さくらんぼ指きりをしてわかれたる
幼なじみのそのさくらんぼ
歌集「ひなげし」の中にある歌である。歌人でもない私の本箱の中にこの美しい一冊の歌集だけはいつもまざつておかれてゐる。讀むわけでもないたゞ時々手にとつては眺めてゐるのである。

この歌集は竹柏舎の心之華叢書の一つで、編者を安廣花子とよび、明治大正の時代山縣雪公の知養として官界にその人ありと謳はれた樞密顧問官故安廣伴一郎氏の

夢 蝶 である。

佐々木信綱博士の序に「をとめありあしたの園につゆをおびてそよ風にゆらぐ麗春花をめで、夕べの露臺にロオヤルダルトンの鉢に匂ふ櫻草をよろこぶ。よき家のまなむすめと生れよき父母を父母として、委ころともにうつしく、うつそみの世のあらしを知らでひととなれり。さくらんぼと指きりしたるそのかみをおもひては、千代紙の上にあえかなる涙をこぼし、夕やけぞらに舞ふとうしみとんぼをはかなむ。をりをりのころこりて此一卷をなしぬ。……」とある。まことに優麗典雅の才媛であつた。

「ひなげし」のぬしと私とのかゝり合ひ——ほんとうに淡き短きその關係は十四年前の大震災によつて生れた。忘れ難いあの大地震、引きつゞいての大火災、刻々と火の手は山の手へと燃え擴がつて來た。安全地帯と自他共に許してゐたK大學病院も必ずしも樂觀をゆるさずとなつて入院患者の戸外避難の準備がそろ／＼始められることゝなつた。當時い號病棟(二等病室)に患者をもつてゐた私は同僚と共にそれぞれ手配し命令一下何時でも避

初冬雜想

美崎一郎

難の出来るやうに準備した。ところがその病棟の中で只一室だけが何の手配も用意もなく附添婦のみたゞ不安げな面持で出たり入ったりしてゐるので訊ねてみるとその室の擔任醫が外出中で、それに患者から誰も來合はせず途方に暮れてゐることです。早速私の組に編入して他の患者達と共に安全に避難したのであつた。この患者こそ當時病床にあつた閨秀歌人安廣花子その人であつたのである。

震災も一先づおさまり世間の喧騒も大分静まつた數ヶ月後の或る日、私ははからずもこの患者と母室との訪問を受け、厚き感謝の言葉とともに紀念に迄とて美しい小冊子一部を贈られた。それが即ちこの「ひなげし」である。

そののち程なく〇〇省の新進官吏に嫁がれたことを聞いたがその後の消息を知る機會もなく過ぎてしまつた。十餘年を経た今日どうして過して居らうであらうか、幾人もの母となられてもやはり麗春花の如く美しく優しい女性であるであらう、歌集「ひなげし」を手にするたびに淡い追憶にひたる。

一、ドンブリシャツボ
何年か前から、療養所は長い胴體を海岸の松林の中に横へてゐる。長い廊下——玄關から角を曲つた入院患者の眼にそれは、無限の廊下として映つた。絶望と希望との切實な感情で、却つて空虚になつた心を歩ませて、廊下のリノリウムは油に泌込んでゐた。いくつかに仕切られた部屋も、うつろな眼には、一つの長いものと見えた。やがて、自分をその上に見出した鐵のベッドも、安堵と不安と太息とを持つてゐた。

冬の午前五時はまだ暗い。床頭臺の側で、忍びやかにキルクの草履が軋む。午前七時やうやく自己を忘れた敏感な神経は、いち早く盗汗と發熱との現實へ意識を呼び戻す。含嗽水の残りがバケツの中へ、ゴホゴホと空けら

れる。クンクンと鳴り始めたスチームの鐵管が、突然ガーンと大きな音を立てる。療養所は今眠りから覺めて、沈澱した空氣を吐き出さうと窓を開く。檢温器のガラスの棒が冷いやりと腋下にしみる。そして火の氣のない日がまた始まる。火氣は、いたづらに空氣を汚濁させるに過ぎない。火氣のない療養法を自然療法といふ。寒さを恐れてはいけない。寒冷な空氣は、肺の傷める面を撫で、更生へと導く。冬こそ療養道に於ける最適の時期である、と院長は説く。

食慾不振を威壓して食器ががち合ふ
午前十時。療養所は虚無の海中に息をひそめる。キルクの草履が部屋から部屋へと軋みを響かせる。——八度三分——この患者は、いつも朝が高い。助眠もいけな

のかしら——絶對安靜を命じられた患者は、黙々として荒れた指先を手首に感じる。無言の闘争である。
始めて一日十分間の歩行を許された患者は一呼吸一步の歩みを柔かに廊下のリノリウムへ押しつけた。足音を立てぬこと、咳をせぬこと、これは一つの修養である。亂暴な歩みは爛れた肺に血線を泌ませた。大きな一つの

咳嗽は、一日の安靜を吹き飛ばした。

午前午後の戸外歩行を許された患者は、松林を抜けて海岸へ出た。海は母親の様にやさしかつた。砂丘に立つた彼等は、遙かに黒煙を上げる汽船に郷愁の思ひを乗せて水平線を走らせる。

聲を奪はれた松本七郎は、小粋なドンブリシャツボを頭に乗せて、口笛を吹き乍ら松林の中を迷つた。

二、秋刀魚

これは支那事變が漁業にどんな影響を及ぼしてゐるかその一例である。明方丸は乗組員五十八名を有してゐたが、中〇〇名が出征した。四回は漁場で召集を知り、直ちに歸港の途についた。一回の如きは、秋刀魚の大群に遭遇して投網を開始したが、召集の無線で中止、港へ直行した。その時同漁場にあつた清勝丸は約二十萬尾を水揚げした。鮪は千哩乃至千七百哩沖迄進出し、一航海約三千五百圓を要する。漁場に着いたばかりで召集を受けたことは大きな打撃である。——然しこれもみ國の爲だ。戦火の巻にある兵隊さんの苦衷を思へば、この位の犠牲は忍ばなければならぬ。我々もまた倒れて後止むの決心

を以て漁業に従事してゐる。——と船主は云ふ。戦場の兵隊さんに活きの良い秋刀魚をうんと喰べさしたい。

三、涙

過ぐる満洲事變の際、嫩江の戦で第一線に立ち、顔面貫通銃創で壯烈極まる戦死を遂げた江名町の中田七造君の母親は、町内でも聞えたしつかり者だつた。それが一度戦死の報を聞くと、恰も人が變つたやうな變化をしてしまつた。偉い人の弔辭が何だ、悔みの言葉、激勵の言葉、賞讃の言葉、そんなもの何になる。御下賜金、皆で勝手に騒ぐが良い。死んだ子にわかるものか。——といふ。それが嵩じて、殆んど正氣と思はれないやうな行動をするやうになつた。あれは子を失くして氣がふれたのだと皆が言つた。賞讃が次第に憐憫と冷笑とに置き替へられて行つた。

その後、靖國神社で戦没者の合祭が行はれた。挺でも動かない婆さんを周囲の者が無理に引き連れて参列させた。婆さんも全然正氣を失つてゐたわけではなかつたらしい。やがて聖上には出御になられた。そして、畏れ多くも遺族の者に御鄭重なる御會釋を賜はり玉座にお着

きになつた。この時を堺として婆さんは、心機一轉以前に勝る女丈夫として甦生してしまつた。婆さんは言ふ。——有難いといふことの骨身に沁み込んだのはこの時でした。ずつと竝んで居られる偉い方々には眼もくれられず、私等だけに御會釋を賜はつて、こんなことをされても良いのだらうか。あゝ、有難いことです。この有難い心は皆様にはわからないでせう。名譽といふのはこの事でせう。私は涙が出て仕様がなかつた——。

山居閑談

小濱牧泉

一、ことば

ことば程所によつて千差萬別なものはない。など、別に鹿爪らしく申さなくても、兎に角山一つ越しただけで何かしら違つてゐるのだから驚く。この狭い磐城にした所で海邊と山と、町と炭礦と色々ながひが発見出来る。

現在でもさうなのだから印刷文化の浸潤しない交通文化の發達しなかつた頃は一體どんなであつたらう。

内藤露沾公の作と傳へられる澤渡地方の方言を詠みこんだのかう言ふのがある。

おんねいのせどの櫻をせなが見て

今年やよんのく咲くべめで言ふ。

又一説には

おんねいのせどの櫻が咲いたため

よつばらのんで見べつけいかな

ともあるが、いづれにしても實に良く詠みこんだものだ。おんねいのは俺のうちのせどは家の後ろでせなは、見で、よんのくは澤山とか立派にとかで、咲くべは咲く、だらうとめでは唯とと言ふ意味だが、とか仰有つてと言ふ位の軽いやゆにも取れる。よつばらは澤山で、見べつけいは見ませう、かだらうと思ふ。

全く澤渡地方の方言を殆ど残らず一首に入れてゐるあたり驚嘆の外はない。蜀山人以上と言ひたい位だ。かうした言葉は今でも盛に使はれてゐる。例へば、「おんねいのな、おやじはおめい、腹痛いだめでまんまもくはね

いめで、ねであなくせに、今、酒買つてこうめでゆつてんだぞや。なあ。」の如きである。

二、名物男

Kと言ふ男がある。未だ現存してゐるが、一寸馬鹿か、捌巧か見當のつかん男である。何でもKの徴兵検査の折の事だと言ふのだが、身體検査が終つて色々質問される事になつた。先づ姓名はと聞かれた。K明瞭に答へて曰く、「せいは五尺六寸、めいはトラホー目」「職業は？」「朝は味噌汁夜はとろろ汁。」とやつて執行官に大喝されたと言ふのだがあんまり話が出來過ぎてどうも信用出來ない。然しこんな一面に又とてもないウエツトを示す事もあるのだから、馬鹿か捌巧か見當がつかなくなるのである。

或る時、平の人が澤渡を訪れて來た。春四月の麗かな日で、季節的にずつと遅れるこの地方は櫻どころか、丁度梅が満開だつた。その梅を見て驚いた平の人が、「ウワー、今つ頃梅が？」

所がそばにKがゐたものだ。すかさず言葉を入れて「なあに、平の方では、暮になんねつか咲かねいだつち

が、こつちぢやね、もう四月に咲いちまんぞ。」
平の人は唖然としてKの顔を見守つたと言ふ。

電氣と提灯との聯想

赤井 嶽 男

平電力のKさんから『小玉川發電所貯水池の掻い乾し
をやるから』と云ふ案内狀を貰つた。

多少に拘らず生魚のまゝ一籠宛持たせて歸す——と云
ふ申し添へに少からず動かされたが、小川郷驛から發電
所迄約半里、そこから魚を捕る現場迄一里弱この合計約
一里半と聞いては、何時神經痛が疼み出して來るか解ら
ぬ自分丈けに、颯爽としてハイクル自信もつかず、それ
に小當りに誘つて見た長男も一向乗り氣にならぬので、
後に怎麼結構な日曜に行けば良かったと後悔する場合な
どを氣遣ひ乍らも此際懲じ乗り出さぬが安全と云ふ事に
大體きめてしまつた。

併し折角の好意を無にするのは失禮と云ふものに當る
ので、案内狀の内容を要約し『秋色濃やかな幽境、躍る
鮮鱗を捕ふ。明後日曜小玉川の清遊』と銘うつて

その第一、第二兩發電所は小玉川の利用に似合せず最新式
の施設によつて毎年十二萬圓の電力料を收入し極めて優良
な成績を収めて居るが、その第一貯水池は水面十六町歩餘の
廣袤を有するので之を利用し縣水産試驗場指導の下に紅鱒や
ワカサギを養殖する事となり、池の掃除を兼ねて中の魚を捕
るのを機會に、明後七日(十一月)の日曜を卜し之の清興を分
つべく各方面二百有餘名に社長から案内狀を發した。現場は
遠近の紅葉に常緑樹を點綴し、秋色頗る揃すべきものあり、
之の自然を背景に數十名の入夫が一帶に潑刺たる鮮鱗を捕ふ
る壯觀は蓋し塵寰に生くる町住ひの人達には一寸想像つかぬ
底のものであらう。

と先づ百匁鰻どころの大提灯記事を其日の新聞に載せ
た。『電氣會社の提灯持ち』自分は一寸操つたくなつた。

○
鮫川の水量に目を附けた林田龜太郎一行は大正八年の
好況時代、資本金三百萬圓の鮫川水電を計畫し、發電事
業を起す代りに江筋の水路を修復してやると云つて地方

の正直な百姓を釣つた。會社は林田の娘婿と云ふ男など
の喰ひ物になつて仕事を始めなかつたので澤山株を持た
せられた土地の者は丸損した事がある。鮫川江筋は小名
濱附近灌漑のため明治三十三年頃三十餘萬圓十ヶ年をか
けた水利工事で、今でこそ昭和の水守治右衛門たる古川
植田町長の獻身的努力によつて近く愈々ピラミット頂上
最後の一石を置かるゝ域に入つて居るが、その時は駄目
な設計から『渠成つて水通ぜず』の大失敗をした事は其
の方面に於ける深刻な農村哀話として今尚ほ世人の記憶
に新なるものがある。同郡内で三百年前澤村勝爲、水守
治右衛門のやつた灌漑工事は恐しい難工事を夫々成功し
澤村は澤村神社と祀られてゐるが測量機械の無い其の方
がえらかつたらしい、土地の高低を正確に測る爲、毎夜
提灯を要所々々に吊したものであるさうな。自分の「電
氣と提灯に關する聯想」はザツト斯うした譯である。

○
炭礦を掘つてゐる間中は賑かであるが、廢坑にな
ると淋しい。坑夫長屋は立ち腐れる、煙の出ない煙突には
秋風落莫今迄騒々しかった反動に淋しさは一しほだ。八

赤羽松堂翁

重葎繁りに茂つて蒼鼠廢馬に隠るゝ——なんて物の哀れ
を感傷せしむる事夥しい。有限の石炭(と云つて平小鐵
道の片濱廻り賛成と云ふわけでは無いが)に比べて電力
は水からとつて無限である。雨さへ石城郡に降つてゐる
間は石炭のやうになくなる事はない。附近山深く谷幽に
して水勢淙々たる處どこでも永遠に電氣のとれるのは何
より有難い。餘談だが先年太平洋の波濤から動力を得よう
と研究を重ねた磐崎村生れの青年學徒君があつたが惜し
い事に天逝してしまつた。

郷土俳人の慈父、北斗莊主人赤羽松堂翁は、去る十一
月廿三日顯溢血のため卒去さる。享年七十歳。門下の
水明、石城、北窓、颯子、華岳、茂堂の諸氏を初め何
鳴、欣々子、寒山子、柴子の諸氏等相集まり廿六日大
寶寺にて俳句葬を営んだが、東京から松村巨淑氏も參
列された。野麥社同人も左記謹供し哀弔の意を表す。

○花 輪 壹 基 野麥社同人一同
○香 賀 金貳圓 野 麥 社

道

吉 田 甫

白壁に沿ふた 曉のみのちの様でもある

時にそれが 昏黄の田市続きの道の様でもある。

この道……

ちぶんたちのみち

×

聲は山を呼び 谷に答へては返し

歩ゆみ來し二十七年

雲の果てから ほこりを吸きあげたりして

幾日も続く 曇り空だ

×

又しても今宵

山麓の田市で誰が鈴ふる

やめよ唄きけば わが命さびし

悲しき鳩笛

×

よれよれてのぼる火繩ひなの秋だと言ふに

風追ひトンボが飛んでゐる。

あゝ歩ゆめど果て遠しこの道

今日も筑波は 曇つてゐる。

海に立つ

瀧 三 地 子

敗残くわにんのかけらを握り

海に立ち 秋の氣流に涙する。

斜にもり上つた波の縮は——

碧い憂愁の襲となつて

白帆の感情をよれ／＼に歪め

かもめの郷愁をかり立てるのだ。

うみ よ

織ぎだらけの 心の畫布を

張りかへる術もなく

海に立ち 唯潮風をのみ込んで居る。

消極しょうきやくの一端を握つたまゝ——

海に立ち

うつむいて了つた人生。

うみ よ

とゞきそうもない彼方の水平線が

片意地な人生の交情の様に

空との境界を嚴守するのだ。

海に立ち

苦々しい思ひ出を

押し流すことすら 不可能で——

若い魂は 窒息しさうでならない。

うみ よ

海綿の様に 穴だらけの雲が

全力を上げて明日の太陽への

こびを養つて居る——。

海に立ち

青繻子のかんかくを

冷い頬に 知つて居る。

砂を蹴り 破れ貝の運命さだまに嘆く

うみよ 透明な……

愛はいづこに。幸はいづこに。

習作

亘 舜 一

白聖の中に
おしこめられた生活——
ふと 窓をあけて
青空をみる

このまゝでは窒息するばかり
しかれども
壁の中から
飛び出せない氣弱さです

掌にふれた白壁のつめたさ
時のながれを
はつきり 意識する

×

戦地からきた手紙——
友が高梁酒を飲み乍ら書いた手紙だ

手垢によれた友の手紙から
れつれつと
祖國の意志が
燃えあがるのだ

「おめでとう」と
手を握りながら
何か 正視できない出征兵士の顔

×

夜あけちかい星あかり——
ぐつと背のびしながら
くらやみをみる (夜勤つゞく)

枯つ葉になつた僕が
へうへうと 霧にながされてゐる
——夜明け——

葉雞頭の赤さが
霧にふかれつゝ
夜更かしの眼にしみこんでくる

品作會眞寫平



臣重間久佐 合 百



きやゝさ

孝友田岡



雪の道 大林一郎

若葉會作品



小名濱風景 大和田智恵子



山茶花

正木千鶴子



菊 關田義子

百合 加澤トヲ



大子園

癡 墟

野 本 大 藏

一、白 日 夢

一夢、閑伽井獄常福寺で暮した事がある。もう十年も前だ。だから未だ火事にならない頃で、あの大きなだ、つひろい庫裡がたつてゐた。

その頃私は全く思想的混亂に陥つて、どうにもならなかつた。毎日の烈しい賣苦の爲に身體も心も目立つて衰弱して行くのを見兼ねた友が、閑伽井獄行をすゝめてくれたのだ。

その友もよく父親と衝突しては興奮して、眼を赤腫のやうに血走らせてゐたものだ。彼は畫家を志望して、しきりに美術校へ入りがつてゐたが、父親がどうしても賛成してくれなかつたのである。

劑に大きなスケッチブックを持つた彼と、ノオト一冊きり何も持つて行かなかつた私は、襖を残らず取り拂つて大廣間にした客間に泊めて貰ふ事にした。

廣い境内に、大きな杉の木立を透して、夜明けの氣配がほのぼのと漂ふと、もう、坊さん達は本堂で朝のお勤めをしてゐる。私達は床の中で、しなれない箱枕を氣にし乍ら、濕つた太鼓の音や、連續的に流れてくるお經を夢現にのう／＼ときいてゐる。

坊さん達が朝食を終へて、大僧正がをられる時は、大僧正を始めとして、小坊主に至るまで甲斐々々しく、おはいよりをして、竹箒で境内を掃き清める頃、私達はやつと起き上るのだ。

今でもそうだが、私は寢覺めの非常に悪い男なので、不機嫌な顔をして障子をあけると、既に境内には掃の跡目が見え、その一隅では、今掃いた塵を焚く薄い青紫の煙が静かに立上つて、杉の木立をかすませている。

私達は何もしなかつた。日中は晝寝だ。夕方は早く障子を閉め切る。蚊蚊が入るからだ。かうすると、蚊張を釣らずに寝られるのである。これは坊さんに教へられたのだ。

ラムプの光で、妙に浮き上つて見える欄間の繪に無氣味な壓迫を受け乍ら、浸み込んだお線香の匂ひを、固い布函の襟に感じた。

私達が出立する朝、霧のやうな雨が麓から押しよせて来た。

「直ぐはれますよ。通り雨ですから」

と若い坊さんが慰め顔に云つてくれた。私達は旅装を整へたまゝ、廊下に立つて雨の通りすぎるのを待つてゐた。坊さんの云つた通り、雨は間もなくはれた。

裏道を幾度か曲つて降ると裾野に達する。裾野はなだらかなスロープををがいて、遙か遠くまで續いてゐる。「まるで、高原だね」

私達は視野の續く限り眺めてから、何とはなしに顔を見合せて笑つた。こゝでも通り雨がやつて来た。向ふからやつてくるなと思つてゐる内に、私達も、一面に生えてゐる丈の高い雜草や灌木も、しつとりとぬれてゐた。雨は来るのも早い、過ぎ去るのも早い。

やがて、雲の切れ目から、日光が直線的に射し込むと、雜草も灌木も光を受けてイキイキとする。

放し飼ひの馬が二頭、静かに草を喰べてゐる。揚雲雀がさわやかに鳴いてゐる。私はこの時、雲雀が案外低くしか飛ばないのに氣がついた。

然し、この時私達は道に迷つてゐた。行けども行けども細道ばかりで、本道に達しないのだ。私達は十分疲れ

て空腹を感じたので、お互ひに不機嫌になつて口をきかなかつた。

道をきゝたくても、人つ子一人に行きあはなかつた。無論人家は見當らない。

ところが、小道の行き詰つた場所右側に折れた私達は、同時に「あつ」と叫んだ。

前面には黒味を帯びた褐色の無恰好な禿山が二つ重なつてゐる。それを背にして、ひどくボロボロになつた幾棟かの長屋が横たはつてゐるのだ。

長屋の屋根はめくれている。扉は外れたまゝだ。硝子のない窓は半開きになつたまゝでゐる。それは動きのない廢屋だつた。

この石炭を掘りつくした廢坑は、そのかみの縁々しさをよそにして、烈々たる白日の下に残骸を横たへてゐた。

「廢城——」

「廢城だ——」

私達は嚴肅な氣持になつて、暫し佇んだ。

そこには人の息吹きも、皮膚の臭ひも感じられなかつた。

然し、私はあの長屋の露路から、茶褐色の髪をした半裸體の少女が、今にも何かあめき乍ら出て來さうな氣がした。半開きの窓からは、その體力以上の烈しい勞働の爲に全精力を出し盡して了つた老婆が、何かの評子に灰色の顔をのぞかせ、さびた金屬的な聲をあげて、カラカラと笑ひ相な氣がした。

突然、その死せる風景は、私の眼近かにぐうんと迫つた。と、次の瞬間、引かれるやうに遠のいた。私は意識を失ひ乍ら、なぜか、油蠟の鳴き聲をハッキリときいた。

二、ちよかいせんきだん

或夏、私はY海岸に轉地してゐる年下の友を訪ねた事がある。Y海岸は海水浴場としては寧ろ汚ない方だつた

が、交通の便が良かったので、可なりな賑ひを呈してゐた。

病後間もないので、泳ぎを禁じられてゐた私は、浴衣着のまゝ、蒼白い瘦すねを砂に投げ出して、栗色のビチビチはねる裸體を、嫉妬に似た感情で眺めなければならなかつた。私は泳ぎたい欲望を幾度も制しながら、友が呆れる程い／＼してゐた。私は水泳の名手として相當の自信を持つてゐたからだ。

浴衣の砂を拂つて、秋達は晝食をとり海岸寄りの裏通りを、短い日蔭を探しては半身をかくすようにして、ゆつくりあるいてゐた。

晝時のせいもあらうが、奇妙な程靜寂で物の氣配さへしない乾燥し切つた道は、私達のあるく度に嚙み嚙き白い砂埃をたてゐた。

道の兩側は低い漁夫の家が並んで、開放された家の中には、長々と裸體のころがつてゐるのが見受けられた。それは鮎の觸りかけた肌を思はせた。

「おや……何だらう、これア」

私は白壁の大きな土蔵造りの建物の前に立止つた。周圍が低い漁夫の家ばかり並んでゐる關係もあらうが、この建物はどつしりした感じを與へてゐる。少し誇張的に云へば、巨然として四隣を睥睨してゐるのだ。

「餘程大きな船主の家と云ふ感じがしないかね」

「さあ……」

友は大して興味も抱かないらしく、

「それにしては、随分荒れてやしませんか」

と云つた。

なる程、そう云はれて見ると、厚味が一尺近くもあらうと思はれる白壁は、所々ずり落ちて、痛々しい位中の骨組を表はしてゐた。私は永い病氣の爲に露になつて、一本々々數へる事の出来る友の肋骨を聯想した。

「一體この建物は住宅なのかね。それとも倉庫なんだらうか」

この疑問は最初から抱いてゐたのだ。一見して格納庫のやうなこの建物は、明らかに倉庫であるらしかつた。然し、屋根の中央から駱駝の縋のやうに、にゅつと突き出た眞四角の二階は確かに住宅だ。四方ガラス戸でかこまれたこの二階は、階下の大きさに較べて、凡そ不似合なものである。住宅と云ふよりは物見櫓と云ふ感じだ。

私はフト佐藤春夫の「女賊扇綺譚」を思ひ出した。

「およかいせんきだん——この浪漫的色彩の濃厚な小説を、私は幾度くり返して讀んだ事か——」

クツタウカン——本字で書けば禿頭港。臺南市の西郊、安平港の奥にある廢港が禿頭港だ。

昔、禿頭港が安平港第一の船着場として繁榮を極めた頃、沈と云ふ豪商が五十艘もジャングを持つて泉州や福州はもとより、遠く廣東までその覇を唱へてゐた。それが一夜颶風が襲つて、海は荒れ、陸は崩れた時、五十艘のジャングは残らず難船したのである。

それからと云ふもの、沈家は秋の落日の如く忽ちのうちに没落して了つたのだ。

佐藤春夫はその素晴らしい描寫を以て、そのかみの豪華な趣きの漂つてゐる禿頭港の廢屋を中心とした妖しく奇しき物語を、私の胸深く印象づけたのだつた。

私は異國風な廢墟の美に、限らない愛着と憧憬を惜しまなかつた。事實それまでは氣にもかけなかつた臺灣に私は旅行したい欲望で、暫らくはうづうづしてゐたものだつた。

今、Y海岸の建物を前にして、私は「女賊扇綺譚」を讀んだ時のやうな興奮を覺えた。

見れば見る程、この建物は、この邊では珍らしい位の豪壯さが漂つてゐた。なる程、この建物は禿頭港の廢屋のやうに、海賊の襲來を防ぐ眞四角な鉄眼窓はない。龍の彫刻をした豪華な石の圓柱も、淡紅色の漆喰で塗つた夢幻的な走馬樓（ダエランダ）もない。

然し大きな白壁の土蔵や、その上に突き出た頑丈な物見櫓は、確かに主人の豪快さを物語つてゐた。ガラス戸

越しに見ると、物見櫓の天井は、真中に一點を中心として放射形をなして張られてあつた。室内は多少支那風を加味した作りらしかった。

恐らくこの主人は、かつては、この海岸切つての大船主で、豪放な性格の所有者かも知れなかつた。迫つた濃い眉、肉のついた太い鼻、ガツシリした顔の大柄な身體を、この物見櫓に上つて、海上を一望の下に見張つてゐたのだ。そして十幾艘の漁船が、朝露をついて掛聲勇しく船出するのを見送つたり、大漁の旗を夕陽に燦々と輝かして凱旋するのを迎へたりして、自然を相手として戦つた人間獨特の、幅のある濁み聲をあげて、快心の笑を發したであらう。

然し、禿頭港の沈一家が、一夜の颶風の爲、没落の憂き目を見たやうに、この主人の一家もまた襲つた時化の爲に、没落の途をたどらなければならなかつた。

物見櫓に上つて、その炯々たる眼を動かさずに、荒れ狂ふ沖をちつと見つめてゐた主人は、不吉な報告を受けたのである。

「旦那様、船は、残らず難波しましたぜウ」

「何——」

「救助船まで……やられました！」

「おお——」

主人は絶望的な叫びをもらして、どつかと腰をおろす。

この「おお」と云ふ誇張的な叫びは、小柄な男がもらしたのでは變なものであるが、大柄なガツシリした男がもらす場合は、非常に戲曲的な効果があつた事であらう。

「ね、入つて見ませんか」

餘り私が無言なので、友が機嫌をとるやうに云つた。すると、私は入つて見てもいいと思つた。若し誰かゞ住

んでゐたら、訪問者の如く靴はつて、何人の家かきいてみようとも思つた。で、私達はこの建物をぐるりと廻つて——つまり海岸に面した表側に行つたのである。

「ちよつと……待つてくれ」

私は手で友を制した。

なぜなら、禿頭港の沈家が没落した後も、その一人娘だけは、氣狂ひになつて唯一人生きながらへてゐた。そして没落した爲に、破談になつたのも知らないで、許婚の男が今日くるか明日くるかと毎日々々待ち續けたのである。そして家に入つてくる男さへ見れば、氣狂ひの悲しさに、人の見別れもつかず、何歳にならうが、十六歳の若々しい泉州言葉で、

「どうしたの、なぜもつと早く来て下さらないの……」

と云つた。丁度それと同じやうに、この一人娘も殉情たる花嫁姿で、許婚の男を待つてゐるのぢやないかと思つた。若し私達がこの家に入つたなら、漁村特有の訛ある聲で、

「どうしたの、なぜもつと早く来て下さらないの」

と云ふ豫感がした。——私は氣をしづめた。

建物の前には、一面に魚の骨がはしてあつた。それがヒドク異臭を放つてゐた。

私達が入つて行くと、網をつくらつてゐた眼のふちの赤い中年の女が、まぶし相にこちらを見上げた。

私はイキナリきびすをめぐらすと、さつさとそこを立去つた。

「どうしたんです。一體」

と友が後から追ひかけて來た。

「急にイヤになつたんだ」

どうやら私の幻想は現實より遙かに優れてゐるやうな氣がした。私は自分の幻想の破れるのを恐れたのである。

みちのくのたび

渡邊 何鳴

八甲田越

ゆくりなく嶺ろの紅葉の雪に遭ふ

葛 沼

沼の碧もみちのひまゆ見てすぎぬ

十和田湖

もみち燃ゆ岩ねをとほに波あらふ
秋時雨來と船窓をとざさしむ

中尊寺金色堂

古き扉の金こんはつはつに秋のかせ

萩 (淨國寺にて)

半谷 絹村

大屋根のかげりて都忘濃き
白萩に夕日はまぶし手をかざす
夕の寺風吹きしきて萩白し
夕の寺白萩ばかり白き哉
萩の寺赤子泣く聲なつかしき

砧の灯

大和田水明

にぶき灯のもるゝ山家や藁砧
灯を足せる母いそぐと砧かな
塗るかへしポストの色や秋の風
秋風や竹にからびし芋の蔓
山門の壁の白さよ秋の風

秋の愁

武石 錦楓

獨り居の供物も置かず十三夜
野火消すや大きく躍る人の影
伸び切りし紫苑の亂れ束ねけり
水に浮く芥の上や秋の霜
炭斗に蜜柑の皮の乾びかな

征 途 (小高驛にて)

今野梅檀子

日盛りに征途の友を送り來ぬ
送り來し夏帽の人驛にあふれ
驛々く發車の氣笛ひびかへる
離れゆく列車に夏の雲湧けり
ひぐらしにつはもの發ちし驛暮れぬ

奧利根

渡邊 武門

奧利根の夕立の驛に粽買ふ
奧利根の霧に沈める温泉の宿
鮎釣に奧利根の嶺々重なれり
聞きとれぬ越の言の葉鮎料理
おとなしき越の藝妓よ鮎料理

草の實

下山田涓至

藁しへのちらばる畦の穂草かな
草の實にまみれし足を洗ひけり
硝子窓透きて白膠木の紅葉かな
蔓紅葉して參道の古木かな
丸木橋わたりて入りぬ茸山

鵲

田口對星

杉鉾や稻抜く音の谷深く
松蔭の黄葉に陽の透きとほる

神前結婚

(榛名神社に於て)

石橋 柴子

霧おろす杉鉾立は神の境内
霧こめて華燭の典を淨らにす
霧流れ神の灯のべに輪をゑがく
霧流れ神への祠冷えまさる
霧にぬれかなでまへらす神の曲
霧にぬれ新郎白哲の顔を正面
霧にぬれ新婦はしらひの髪おもく
霧しづくせる玉串を並みさぐ
霧を截ち劍振り舞へる巫女

漁夫の唄

小 濱 牧 泉

さらりどんどとヨ
罌の波は
アラヨ一波は
波はくだけてヨ
槽につき當る
アラエー
ソラエー
ひと急ぎ
あれは燈臺ヨ
光がうるむ
アラヨ一うるむ
うるむ灯影にヨ
女の笑くぼ
アラエー
ソラエー
ひと急ぎ

ありや・なしや

「無軌道」歌壇の思ひ出

松 村 清

昭和三年三月であるから今から「昔前」の「無軌道」であるが、今更「無軌道」歌壇を顧みて、恐らく僕には筆のたたない注文である。「無軌道」に歌壇ありや、ないやである。

同人で僕だけが短歌をやつてゐた。そして無軌道は文藝のあらゆる部門を網羅せん主義のもとに創刊された。創刊號は僕に編輯が廻つて来て、短歌の方は特に僕が擔當してゐた。『が勿論歌稿の依頼などしてなかつた。決極初號には北條重光、押尾孝、佐々木顯、佐藤義家の諸君と僕の五人、詠草廿五百と云ふ盛観？さてあつたが、二號には相當投稿があつた。しかし詩南車に如く「若菜集」とか

「春宵集」と云ふ様に分類登載などは到底我慢のならない煩雜さでもあつたし、かくも甘くする必要もなかつた譯だ。詩南車の存在があるからである。決極「五人集」と題し八首をとりあげた。宮田君島田丹光その他と云ふもの凄く苦痛だ。五人集の一首に珍田一郎のはらわたの動くありさま
悪趣味でひどくきたない感じはするが歌にすると云ふ強氣な茶目氣を買つて抜いた。

想像つくと思ふ。遂に參號から俳句も同様「有軌道」に乗り移つて貰ふことにした。
この三號頃から「詩南車」が俄然短歌専門誌の如き型態となつて現れたと思ふが——無軌道もいい作品が來たらあつた。——こんな様な方針と變つてゐた。
「無軌道」歌壇を顧みることもない、歌壇がなかつたと云ふ方が正しいかも知れない。
前述の如き状態で、御もとめになつた主眼と違つたことを書かねばならなくなつた點は御了察を御願致します。
——一〇、一二

終會

石城地方俳人の親睦を圖るため
石橋柴子君等はこの程「終會」を作つたが、その第一回會は去る九月十九日、何鳴、欣々子、光聖等の諸氏相集り、その後毎月一回づゝ例會を開いて俳句の研究をつやけてゐる。

箱崎半吾

一息に戦ひとりしめろぎのいくさのあとを聞けばかしこさ
慰問袋の禮狀に書きしるされし戦況を讀む子等を集めて
父上と共に綴摺る秋日和働くことのしみにみうれし
父病みて暮したゞさり飼ひ馴れし愛し牛をば吾が賣らむとす

草野葉子

病院の重き空気をぬけて來し夜なり寒き秋風の街
母病むと歸省たる子のまめだちて働き居るもあはれなりけり
病む母のいささかなれど食増せば我れも嬉しく食卓につく
手を出せばすがりくる子のつばら腫に我が愛情はおのづからなる
我れの背を船になぞらふ幼子にとくこぎませと我れも幼き

白鷺あきら

雨はるる朝の秋の空澄みてきこくる物の音の静けさ
秋晴れの野路を來たる飴賣りの風車みなよく廻るなり
さくさくと刈りゆく稲の穂の重みほくそ笑まるる出來心かな

小野一路

山風の膚に沁む日となりにけり悲しき想ひ絶えまなくして
旅に暮れて袖の埋火かきおこし靜かに思ふ故郷の家
幼き日紙鐵砲をならしける夕暮れの土堤のさみしき思ひ出

野原百合雄

満山は紅葉に煙る矢祭の臨時停車場に吾も下車せる (矢祭山)
紅葉は陽にてり映えて満山は人賑はひぬ日曜日なり
矢祭山登るかたへの老楓秀枝早くも陽光あかるし

佐藤正顯

圍みぬし白衣の婦の憂ひ顔彼の病人は重りしならむ
寝ねつけず寝返る頭重あつし巡廻る婦の遠のきゆくに
冷やけし夜風に頬の心地よしうづく虫齒に寝ねられもせず
枕邊に活けられし小菊ひとつそりと眼溢りてわれに熱あり
秋深き日も暮れぐれて病む人は故郷のひとなど想ひあるらし

大平新三

あきらめし事のつきつき思ひでて吾れのねさめの苦しかりけり
鶏頭の花さへ枯れて庭の風あきらめられぬこともなからむ

釋獨歩

(故秋間小路君を憶ふ)
石油をのみて病魔を征服すと歌ひし友は逝きて幾秋ぞ
巧まざる素直さもてる友の性は人惹きつくるよき性なりき
おのづから寂び備はりていつくしき歌詠める友今は世になし
友は惜しし友は傷はし吾が齡の半ばに満たてみまかりしかな

前輯歌評

高木愛二

吾娘に得し子をうひ孫と呼びてたぬしみ
づから祖父と呼びて寂しき 高久晚霞氏
みどり兄一通冒頭の歌。うひ孫を得し喜びと
自ら祖父と呼ぶ寂しさを詠み込んだ歌で具象
性も迫力もないが生活歌として斯ういふ歌も
取り上げらるべきと思ふ。
うひ孫とやがてまた來む暮日の玩具屋を
わがつぶさに見ありく 同
人間愛の沈潜してある歌。「つぶさに」作者
が躍動してある。流石老巧。
赤とんぼはまたまたとべる河原邊を白雲の
かげ疾く移りゆく 草野みどり氏
「たまたまた」に過去の作者の行動も活かされ
てゐる。「移り」は走りや、流れに比し適切。
赤と白の諧調も苦心の跡。淡々と詠まれてゐ
るがうまい歌である。但し下句に雄大性を持
たしたらと思ふ。
三代を血族によりて結婚をせし人の子が

不具に産れたる 佐久間安生氏

素材がもたらす難かも知れぬが一連みな言葉
目立ちて心足らず。血族によりて結婚を「は
間が伸びてゐる」眞迫性に乏しい。第五句「ま
な開かぬ」とてもしたら具體の中に意圖が
活きてははいか。

築岸に寄り合ふ波はほの暗く潮立ちにけり
夕漂ひて 城 芝鳴氏

夕方潮立つて來た所への觀點は鋭いが「ほの
暗く」と「夕漂ひて」の重複「寄り合ふ波」と
「潮立つ」の整理等一段の推敲が必要である。
一體この作者はいふ所を捉へ鋭い所があり皆
相當の歌であるが整理を必要とする難を見る
不束の身の働きの據るところ愁ひつくし
て残るものなし 佐藤 清長氏
一連みな不熟の句多く感銘し難い。この歌は
分るが抽象された觀念としてである。陳腐で
ある。

もろこしの葉をすゞ風の吹きぬけてけさ
立つ秋の高き晴れかな 野本多露夫氏
天高くして馬肥ゆるの氣を感じる。下句の
繁りがさう感得させるのである。一連みな新
鮮、發瀾さを覺ゆ。毎輯多作なのは羨しい限
り。

野麥短歌會の記



『野麥』
第一回短歌會を、
岩城新聞
社後援に
て、十月
十日午前
十時から
マルトモ
ホールで
開く。
いざさ
か顔揃ひ
も淋しかつたが、歌會にはなくてはならぬ、小
山田、松村、美崎、佐々木の諸氏を迎へ、又

遠くから城、小濱、高橋、箱崎の諸氏の出席あり、その他、柏木、釋、佐藤、池上の諸氏と鈴木、白木、野木、參會するもの十五名。
先づ『野麥』に就いて忌憚のない批評を語り合つて、晝食をとり休憩。記念撮影、寄せ書などあつて少し息抜きをする。

食後いよいよ歌會にうつる。題詠『葉』
『聲』時局に因めるもの『五十首を組上に、
佐藤、高橋の兩氏克く論じ、白木氏鋭く急所
を衝けば、小山田氏の諄々懇切なる指導批評
の下に一同感銘、日曜日の騒々しさもよそに
こゝばかりは將に崇高なる短歌藝術の最高
潮であつた。

終つて現在の『野麥』編輯について、種々

短歌會詠草

夕されば東の様の八つ手の葉わたる風あり夏
退くおぼゆ 高橋 端
吹き上ぐる葛の裏葉の青風草のなかり虫鳴
きにけり 箱崎 半吾
松欄の葉かげ曇り硝子に映る日は安けき思ひ
に負ふ氣なくをり 城芝 鳴
乗の葉は狂女のさまにくるめけり今宵いよいよ
雨となるらし 赤井 嶺男
もろこしの葉すれさやさやなり止まず早くも
出てし夕月のかけ 美崎 一郎
心地よき潮濕りの磯山にこぼれ松葉を踏みて
遊びぬ 釋 獨歩
つながれて葛葉喰み居る大き牛の張り切つた
乳房の乳の漏れ居り 箱崎 半吾
虎杖のすがれ葉を吹く潮風に暮れ寂びし丘
をい行くも 赤井 嶺男
八つ手の葉もるゝ陽がげに金魚らは水面に浮
び息吐きて居り 美崎 一郎
わが背戸をさき青につゝむ橘の葉にざわめく秋
のいつか來にけり 永山 徳一

御熱心なる言葉をきく。

一同歌作の上に、更に更に飛躍を試みるべ
く、各々その所論をのべ、誠に有意義なる會
合を終つて夕方散會した。

尙當日、出席されるべき筈であつた高久、
永山、高木、佐久間、田中、草野の諸氏が、
俄に都合悪しく缺席されたことは、非常に殘
念なことであつた。

雑誌が戦場なら、歌會は更に現實的な實戰
である。雑誌が全局的な砲彈戦なら、歌會は
局部的な肉弾戦である。

それともう一つは、ふだん誌上で、名前ば
かり知つてゐた、その實際の人と人が、半
日を、一夕を、愉快に談笑裡に、終始するこ
との出来るのが、歌會に恵まれた特權ではあ
る。

歌も作らず、机上に端坐して、研究ばかり
してゐた人達も、一度この席に出ると、具體

的に、
歌の傾
向、作
法など
と云ふ
やうな
ものが
判り、
やはり
自分の獨り合點ばかりではなく、大局への眼
のひらけてくるやうになる。
そこに歌會の面白味を感じてくると思ふ、
と云ふことを一言附けて置く。(野木)

十二月小集

日時 十二月十八日午後六時
場所 マルトモ食堂階上
會費 金五十錢(當日持參)

青木の葉はうらに青き實のなりて赤くなりな
ば小鳥ついでむ 佐々木 顯
若き希望は捨てがてぬかも夕光に松欄の葉動
くガラス見て居り 城芝 鳴
つれづれの日足さだまり大輪の菊の諸葉の色
は深めり 佐藤 清長
梧桐の枝に吹きこむ風に揺れゆれて葉裏はひ
るがへりけり 同 人
晝もなほつゆけき萩の葉がくりと濡れしづき
つゝ虫の啼き居り 野木 冬霞夫
葉鶏頭焰と燃えていきほへる秋陽の緑のバリ
カンの音 同 人

『聲』
二階の鳥物言ふ聲の母に似てその氣質までは
よく似る 佐々木 顯
今宵また軍用列車過ぐるらん歡呼の聲の夜空
どよまず 釋 獨歩
この一球の最後のコース見極めつ聲にはいだ
しわたちるたり(野球) 松村 清
磯千鳥飛び來て鳴ける聲澄めりこの静か夜を
海の荒るるか 美崎 一郎
さゝげ來る白木の箱に驢頭を埋むる人等たゞ
聲を吞む 永山 徳一
戦況のラヂオ勇まし千等健く朝餉に並ぶ秋晴

編輯者への注文

高 端 純

私は現今の所謂新人と稱する人達に對する
舊人とも云ふべき部類に屬する人物である。
従つて所謂新人と稱する人達とは、自ら教養
思想、感情を異にしてゐるので、此一文など
も多分、的外れた注文状に終る事と思ふが
幸に他山の石ともなれば結構である。

第一、私の怪訝に堪へざることは編輯者の
態度である。私は野麥創刊號に於ける、編輯
者が執筆したる「野麥萌ゆ」といふ宣言文め
いた一文の中に

今後、この仕事を續けてゆくには、どう
しても各方面のいゝんな人達の理解ある御
援助と御協力を願はねばならぬ

と同情を惹く様な優しい表情を披露して居り
郷土人の集りは、あくまで無用の闘争を避
け、和氣霽々裡に終始したいのが念願
と大いに寛厚な包容力のある態度を示してあ
るので、私達の様な舊人であり乍ら、特に現
代の短歌でふ物に何等の素養も訓練もない自
分を忘却して、所謂地方文化の向上を念願す

る一途心に、参加を敢行した次第であつた。

然るに第二號の前報歌壇短評に於て、早く
も辛辣な批評が出て、或る同人？ は「散文
であつても歌ではない」と突ッ放され、殊に
或る先輩者に對して「獨りよがりなものの
感」と反對氣勢を示し、その亦次の第三號で
は、之れも同人らしい一人を捉へて「自分だ
けが解つてゐる歌」と一鞭し、更に喉煙室欄
に於て（之れは讀者の投書と認むるのだが、
編輯者に於て之を採録した以上は、勿論共鳴
する筋があつての事と信ずる）遂に四人の定
連に對し、放逐命令の様な酷評を下し、私の
怪訝に堪へぬとは即ち此點である。これが果
して第一號の宣言にある、無用の闘争を避ける
、和氣霽々の表示であらうか。各方面の協
力を仰ぐ所以の手段であらうか。

但し同じく第一號の宣言らしい文中に「批
評的な態度をとる」必要を附説してゐる所を
見ると、これも首肯されぬ事はないが、かか
る批評を下すことが、果してこの野麥を成長
せしめてゆく適當の手段方法であらうか。
私はこの批評を受けた或る二人から直接に
一人は憤激し、一人は「泣きたくなる」と悲
鳴をあげてゐる事を正視してゐるので、一層

この感を深くせざるを得ない。

社 費 據 金 芳 名

十一月末日現在

○金壹圓也	村 瀬 露 草
○金壹圓也	鈴木 欣 子
○金壹圓也	高 久 曉 霞
○金貳圓也	高 木 愛 二
○金貳圓也	佐 川 和 弘
○金五拾錢	瀧 三 地 子
○金五拾錢	大 和 田 水 明
○金貳圓也	小 濱 牧 泉
○金壹圓也	永 島 綾 子
○金壹圓也	佐 久 間 安 生
○金五拾錢	中 山 吉 雄
○金五拾錢	美 崎 一 郎
○金五拾錢	渡 邊 何 鳴
○金五拾錢	萩 原 た け
○金貳圓也	城 芝 鳴
○金壹圓也	箱 崎 半 吾
○金壹圓也	小 湊 清 正
○金壹圓也	松 村 清 正
○金壹圓也	草 野 み どり
○金壹圓也	白 木 英 子
○金壹圓也	石 本 多 震
○金五拾圓也	野 本 多 震

謂角を矯めんとして牛を殺すとの比喩は、遺
憾乍ら現在の野麥編輯者に於て、正に甘受せ
ねばならぬ訓語なりと斷ずるのである。

も一つ古語に「小異を捨てて大同に就け」
といはれた事は、創刊當時の念願を回顧する
と同時に、此際ぜひ再考を乞ひたいと思ふ。

これからは一面に同人や社友を禮遇し、他
面に於て廣く初歩の者を誘導する爲の讀者欄
といった様な紙面をつくり、大いに千客萬來
の態度を示されたらどうか。そして批評を加
へ、更に多少の添削でも試みたならば、益々
讀者も投稿者も殖える事だらうと思ふ。更に
地方の文化的史料、即ち名たる古人の評傳
とか、又は名所舊蹟の考察とかを試みるのも
郷土雜誌の一義務かと考へられるのである
現代大家の名歌評釋を一二頁位載せる事も、
非常に私に私と思ふが如何であらうか。

最後に社費の件であるが、これは既に三號
雜誌の域を過した事で、何の遠慮も要さぬ事
と思ふ故、同人は幾程、社友は幾程とどしど
し請求して然るべしと思ふ。廣告なども出来
得るだけ勧誘して、而して社礎を堅固にして
可然と思ふがどうであらうか。

赤井 嶽男

疲れつゝ木株に憩ふ眞晝なり木蔭ゆとほる鶏
の聲

秋近く夕立のあとををしきり庭木ごとく
響の聲充つ

山門の静けき松の木末より頬白の聲澄み透る
なり

片假名をうそら覺えて聲高う響み愛しく繪
本讀む吾子

もののかげ冷たく土にある晝は虫の聲さへか
すれかちなる

おのづからよりあがりくる萬歳の聲の浪なり
吾もおらべる

同 人

『時局に因める』

我軍の力を吾れは疑はずたゝかひの記事日に
／＼見るも

慰問品包み終へつゝ思ひけり笑みて開かんま
すらを顔

萬歳の聲は天地にこだましてますすらを旗う
ち振りつゆく

その人のなかに交りて現つなく我れも軍歌は
歌ひ居りけり

軍刀の金具の金色を目に残し友遠くゆく今朝
の秋風

小山田 滋

「友聲」短歌作品抄

十一月

馬をらぬ腰の中の投草に鳴くこほろぎは夜も
すがらなり

庭竹に霧の流るゝしきりなり上空青くはれゆ
きにいつ

召集は必ずあらむあれやこれや思ひて寝ねず
暑き夜更けを

いさゝかの借金のことと思ひつゝ秋の眞晝を稻
刈りてをり

友がみな月給取りになりたれどいまだに土を
離れて住めず

をみなこの軀を吾れが抱くとき北斗七星をう
つくしとみぬ

ひそかにもおそれひそかに求めるし斷崖に立
ちて今は眼をとづ

秋雨に踏の音はこもりつゝ夜をこめて通る微
發馬は

兵を送りて何かはさびし秋草の燃ゆるを見つゝ
ゝ炭を吸ふも

夕食にとふかし芋食む戦線の兵らのひげのの
谷しも映れる

谷の湯はしづかけれども住む人のけしき性
に時折ふれぬ

須田 利雄

○一人一唱(自第三輯作品抄)

ヒヤシンスの青立ちの芽のやはらかさ見の
なしさに指を觸りけり 新妻久満夫
夕づくと雨はみぞれ庭木瓜の花びら重く咲
きこりたる 松村 清
おだやかに眼を閉ぢし面ざしは佳き歌思ふ在
りし日の君 柏木 哲
砂埃り眼もあけえざり眞向ひにをみなはかな
し夢踏みてゐる 佐々木 顯
雀らの聲をあつめて竹簾の日だまりは朝寒た
らしつ 高木 愛二
すゝり泣くその圓肩のおのきを愛しと見つ
つ別れけるかな 國玉 喜輝
カーネーションの花あかあかとしづかなり若
きをんなの死ぬる日となる 白木 英尾
火箸もてあかざれ骨をのしてゐるやつれし母
のうしろかげはも 箱崎 半吾
何一つあてのなくなる日ありてふらり月夜
を待に出てくる 佐藤 清長
肌寒く染りとさせる映の晝發電所のうなりと
どろにひびく 戸部 曙歌
おもおもと雪をかつぎて斷崖にうねりを見す
る冬の萩なり 吉田 鑑
尾をふりてせきれい一つ靜かなる薔の上の春
の青空 野本多震夫

喫煙室

○第三輯の新三さんへ
女人六唱、殊に「灰皿に捨てて残りし煙のご
と……」など、しつかりと人の心を掴んだ良
い歌だと思ひます。然し貴方の仰言る面白く
ない歌の中にも、
やましき事の厭ふ父はも今日も亦人とあら
がふ聲のつゞけり。
期うした良い歌が入つて居りました。どうか
すると、狡猾に偽善的に、虚飾になり勝ち
な現代人を叩きつけて、一路古來傳統の徳道
を、歩まれる作者の嚴父、その美風を賞讃す
る子の美はしい心。時代に贈る香ばしい花束
で無いでせうか。(一路生)
○詩南車廢刊以來空白な沈澱を破つて、再び
郷土誌が生れた事は喜びに耐えません。この
野麥からたゞよふ氣分は、非常な懐しみを感
じます。その上、當時無軌道派と呼ばれ、海
岸線派と呼ばれ、詩南車と對立的な人々が、
今迄の感情を捨てて、或は同人となり、或は
寄稿家となつて、美しい情景を見せて居られ
る事は平市と共に生れた野麥の最大の收穫で

嬉しい事の一つです。

戦争は戦争で、詩は詩であり得ないでせう
時代意識と感情は必ず合一する筈で、その
結果チャリツクな文藝誌が出来ても、笑ふ
者はないでせう。何卒時局にふさわしい野麥
を高らかに掲げて、大いに自重して頂きたい
決して自ら卑下する要あらんやです。情熱
を失はず御健闘を願ひます。(佐藤政實)

○歌壇合評、非常に参考になりました。批評
があつてこそはじめて、進歩があり向上があ
ると思ひます。今後ともつゞけて貰ひたいの
です。(新三)

○甘える思想程我等の眞實の生活の侵蝕力を
妨げるものはないと倉田百三は言つた。
打たれ、叩かれる事によつて強靱な人間の
意力も迫力も、深い味はひも出るはひも出や
うと言ふものだ。

自らも甘え、人に甘やかされ、内省もな
く苦悶もなく、自家撞着と個人陶醉に溺れて
どこに向上があり進歩があらう。

ひとりよがり退嬰と無氣力以外の何物で
もないと言つては過言だらうか。
批評と言ふ事はする方から言つても、し
る方から言つても大切な事だ。

批評精神は一つの指導精神でなければなら
ぬ。それによつて剔抉され啓蒙されるもので
なければならぬ。叩いて鍛へて伸ばすもので
なくてはならぬ。良い所も、悪い所もよく見
て、その方向へ示唆を與へるのが批評なのだ
批評が當つてないと思つたら堂々批評へ
の反駁をなすべきだ。それを、良い批評され
るのなら良いが苛められるのは困るなどと、
それを本當に困る事だ。

警新に於ける島田忠夫氏の野麥感是有難た
かつた。雑誌の改善と言ふやうな事はどうか
ら同人間で氏の寸感以上に考へてゐるつもり、
追々變化して行きます。

短歌で高久氏と小山田氏を持上げ俳句で渡
邊氏と赤羽氏を持上げ、そして氏に依て見出
され激賞された新人の一人も今までの弊城に
なかつたやうに思ふと、氏の批評は或る意味
を感じずにはおられないのだ。

が氏に見出される爲には、作品的ではなく
社會的に知名な人にならなければならぬの
ではないかと、こんな事を考へる私自身どう
かしてゐるのかも知れない。

瀧三地子氏の詩はいい。現に書いてゐる弊
城詩人のうち一番いいやうに思ふ。唯、氏

の詩的技術は詩的感覚を踏越えて飛躍してゐ
る。これは技術が感覚を蹂躪する危険がある
感受性を深め感覚をいたはる事を忘れない
でほしい。それとない表現がマンネリズム
になり身動きが出来なくなる。とに角長き詩
人である。妄言多謝。(伊納川銀)

○田村月環様の會津の旅を懐しく接しました
田村様が會津に旅したのは何時頃かは存じま
せんが作品よりして私と同じ頃ではなかつた
でせうか。私は九月十五日兄の出征を見送り
年若松に行き、雨降る午後鶴ヶ城跡にて、
若松の少年詩人羽柴君と初対面して翌十六日
午前飯盛山に参拜致しました。少年烈士の墓
前にて禮拜して自刃跡にしばし追想の感涙に
むせび。

若人の恨らみを呑める自刃跡、はるかな城
の松をのぞめる。
の歌を作つた午後、沼尻に向ひました。中ノ
澤西村屋に五日間滞留して歸家したのでした
それだけに御氏の會津の旅は幼なき私の詩
心に應へるものがあり興味致した譯でありま
す。以後宜しく御交情の程を。

(野原百合雄)

梅の花咲く日となりていくたりか季節坑夫の
かへりゆく驛 小山田 滋
サボテンと百合の大輪咲く今朝は貧し庭も
明るくありぬ 高久 晩霞
朝風にゆらぐハツ手に片照りつやがて日射し
は後におよべり 高端 巍
われのみのしるかなしみはいはてこそ靜座し
て今日も千字文書く 田部 君子
みなぎらふ薄にこり水陽に透きて石をれぞれ
に水の垢見ゆ 草野 葉子
わが生活いよいよくらし放膽の雑誌まぐらに
今日も寝て居り 田中 賢介
悔ひ秘めて生きる一生のおろかさを思ひみる
とき窓ゆるする風 佐久間安生
巖肌のまはらに茂る露路の一葉々々に夕なづ
み来し 城 芝鳴
ひたぶるに逢ふ日を待ちし鏡心の今はむなし
く秋の花ちる 伊藤 弘道
さまざまの己が噂を耳にしぬ涙ぐみつゝ鏡ぬ
ぐふも 草野 葉子
おのづから涙ながれてをりにけり晝を啼き澄
むこほろぎの聲 野原百合雄
潮はいまゆたかにみちぬ大橋の橋杭の邊はう
づをなしつゝ 志賀 種子
劔太刀似きてそ起てますらを名をこそ惜
しめ身をな惜しみそ 吉岡 獨歩

野麥だより

○十二月となると、めつかり寒くなりまし。朝、まづ新聞を披けて、白雪に覆はれた遠い戦地の風景に接すると、其處に戦へるわが皇軍の將兵の上に熱い思ひをかよはせずにはおれません。まして肉身や親戚知友などを送つてゐる方達は、備風沐雨のその日その日に遠く思ひを馳せない日は一日としでなからうと思ひます。

○野麥の關係者からは未だ一人も征途についてゐないのですが、誰か戦線から原稿を送つてよこすやうな人があつてもいいと思つて居ります。國を擧げて戦時體制下にある際にあたり、私たちのみが、なんとなく他所見してゐるやうで我ながら磨甲斐ないと思ふ、いはゆる一國の戦時文化に對して野麥全體を一步前進させなければなるまいと深く感じております。

○今輯は、これが昭和十二年の掉尾の編輯です。私がたゞの一字も書かずにはやれたことは、實に氣持のいい編輯でした。元來、私は一人一役一研究——といふ考へておりますので、編輯する者自身がいゝろいろと書いてゐては、個人雜誌のやうになつてしまつて面白くないと思つてゐるのです。

○皆さんが其の作品について研究するならば、私は専ら編輯といふことに頭をつかひたい。郷土文化人の間に野麥が一つの城砦たらんとするには、私のやうな縁下の仕事をやる者もなくてはならないと思ひます。兎やかくと論難され乍らいてゆくつもりです。私たち一同は、一人一人が戦士になつた氣持で努力してゆかうと思ひます。

○私は、地方同人雜誌の特殊性をどれだけ生かしてゆけるかと、常に考へております。只、あれもこれもと一遍にはやれないので、澤

庵石で壓へつけるやうに言はれたところで仕方ない。同時に、私は安易な自己満足に墮すやうな雜誌になることを最も戒めねばならなと思ふのです。作品批評を忍せにしないのも、一つはそのためなのであります。

○今輯、五十嵐博士の「ひなげし」短歌人にとつては全くうれしくなる文章で、眞に珠玉の小品です。美崎さんの回春園文學もますます冴えてきて、小濱さんの民俗學的小話と好一對です。短歌では在京の島田忠夫さんが稿を寄せてくれました。郷土出身の各方面の方達から寄稿をいただくのはありがたいと思つております。

○今後、野麥を中心とする小集をひらいて、二人でも三人でも、集つただけの人達でいろいろと語り合つて行きたいと思ひます。これには一々案内状を出しませんから氣の向いたお方はいつでもお出かけ下さい。お互ひに作品について

検討したり、編輯に對する意見を述べたり、或は最近の文化的な問題について語つたり、そこに幾何かの意義をあらしめたいのです。

○次輯からは発行日を一定して、隔月十日といたします。新年には別に何も致しません。二月の第五輯からは皆さんの新しい文學的情熱で全誌をうづめたく考へております。どうぞ、力作をどんどん寄こしていただきます。

○末筆ながら皆さんの恙なく御越年なされんことを祈つて、送年の言葉といたします。(し)

次輯原稿締切 一月十日

野麥	
編輯	昭和十二年二月一日印刷納本
發行人	昭和十二年五月十日發行
編輯	野本孝雄
印刷所	東京市豊島區西目黒
印刷所	正明舎
發行所	福島縣平市四丁目二番
發行所	柴田書店
電話	二三四番

昭和十二年十二月十一日
發行本

